

平成28年度 ほくぎん若手研究者助成金 研究実績報告書

氏名	所属・職名	助成金額
松山 淳	経済学部・准教授	800,000 円
研究課題名	多次元貧困指標を用いた日本の貧困問題の実証研究	
研究の概要	<p>本研究は、アマルティア・センによるケイパビリティ・アプローチを、近年、貧困分析における理論と応用の面で発展させた、S.Alkire、J.Foster が提唱した貧困の測定手法（Alkire-Foster method）を用いることにより、現代日本の「豊かさの中の貧困」という問題を実証的に分析することを目的とする。貧困に関する多くの分析は所得の観点のみからなされるのに対し、Alkire-Foster method の特色は、所得だけではなく、教育、健康などの多次元の観点から貧困を包括的に測定する。本研究では、日本の個票データに彼らの分析手法を応用することで、日本における多次元貧困度を測定し、我が国における貧困問題に対して新たな視点から、その原因を明らかにする。</p>	
研究の成果	<p>本研究では、『全国消費実態調査』平成元年、6年、11年および16年の2人以上世帯の個票データに Alkire-Foster method を応用し、各調査年の多次元貧困度の測定を行った。ここでいう多次元とは、本研究では、非耐久消費、貯蓄、家庭用耐久財、および住環境という4つの次元からなる。第一に、日本全体の貧困率の推移を4つの次元ごとに時系列的に見ると、非耐久消費および貯蓄の貧困率については増加傾向にある一方で、家庭用耐久財および住環境の貧困率については減少傾向にあった。第二に、4つの次元の貧困率を Alkire-Foster method で集計した多次元貧困指標は、時系列的に見て減少傾向にあるという結果が得られた。この結果の考えられる理由として、家庭用耐久財および住環境の貧困率の減少のペースが、非耐久消費および貯蓄の貧困率の増加のペースを上回っている為だと考えられる。第三に、調査年ごとのサンプルを、母子世帯、両親世帯、三世帯同居世帯および子供なし世帯の4つのグループに分け、世帯別の多次元貧困度の測定を行った。①本研究で用いた多次元貧困指標で測った場合、どの世帯の多次元貧困度も時系列的に見て減少傾向にある。②どの調査年においても多次元貧困度は母子世帯が最も高く、2番目に両親世帯が位置しており、三世帯同居世帯と子供なし世帯が3あるいは4番目に位置する。③母子世帯の貧困率は、時系列的には減少傾向にあるものの、一貫して高水準を維持している。④1990年代半ば以降、貧困世帯層の固定化が生じている可能性が明らかになった。</p>	
研究成果発表状況	<p>雑誌論文 Measuring Poverty in Japan from a Multidimensional Perspective, 『公的統計のマイクロデータ等を用いた研究の新展開（平成28年度）報告要旨集』, pp.19-41</p> <p>学会発表 1. Measuring Poverty in Japan from a Multidimensional Perspective, the 14<sup>th</sup> Northeast Asian Academic Network, at Kangwong National Univ., Rep. of Korea, Aug. 24, 2016. 2. 同報告タイトル, The 2016 Human Development and Capability Association Conference, at Hitotsubashi University, Japan, Sep. 2, 2016 3. 同報告タイトル, 技術変化と所得格差, 於 東北大学, Nov. 4, 2016</p>	

	4. 同報告タイトル, 公的統計のマイクロデータに関する研究集会, 於 統計数理研究所, Nov. 25, 2016		
経費の執行 状況	区分	執行額(円)	備考
	[物品費]		
	ノートパソコン	274,800 円	
	パソコン	99,900 円	
	ソフトウェア Microsoft Office	37,440 円	
	ソフトウェア ライトストーン Stata/SE 14	89,100 円	
	プリンタ	36,814 円	
	書籍	112,762 円	
	[旅費]		
	学会参加費	45,444 円	
成果発表旅費	76,500 円		
[その他]			
全国消費実態調査	27,240 円		
合計	800,000 円		